

注文の多い料理店

原作 = 宮沢 賢治

簡約 = 栗野 真紀子

挿絵 = 尾関 健治

監修 = NPO法人日本語多読研究会

レベル 3 vol.1

にほんごよむよむ文庫



これは、日本語を勉強している人のための「読みもの」シリーズです。4レベルに分かれていて、昔話、創作、名作、伝記などいろいろな話があります。レベルごとに言葉や文法が制限されていて、読みやすく書かれています。漢字には全てひらがなが付いています。辞書を引かないでどんどん読んでみましょう。

レベル	クラス	語彙数	文字数 / 1話
1	初級前半	350	400 ~ 1500
2	初級後半	500	1500 ~ 2500
3	初中級	800	2500 ~ 5000
4	中級	1300	5000 ~ 10000

注文の多い料理店

音声CD入り

二人の狩人が、森の中を歩いています。おなかもすいたし、寒いので、帰ろうとすると、突然、森の中にレストランが現れます。たくさんの童話を残した宮沢賢治の名作。

ここは、山の中です。

若い男が二人、歩いています。鉄砲を持って、白い大きな犬を二匹連れていきます。

二人は、もう何時間も山の中を歩いています。

一人が言いました。

「どうしてこの山には動物がないんだ？ 鳥もいないし、うさぎもいない。つまらな〜」

もう一人も言いました。

「この鉄砲で、鹿をパパーンと撃ちたいなあ。早く撃ちたいなあ。きっと楽しいだろうなあ」

二人は東京から来たのです。

一時間前まで、案内の人も一緒に歩いていたのですが、どこかへ行ってしまいました。

木がだんだん多くなってきました。木の葉がたくさん落ちています。





白い大きな二匹の犬が、急にバタンと倒れました。

二人はびっくりして、犬のそばに行きました。犬は死んでいました。

「この犬は三十万円だったんだ」

「僕の犬も高かった」

二人は、残念そうに言いました。

それから、一人が言いました。

「おなかですいた。僕は、もう帰ろうと思う」

もう一人も言いました。

「寒くなったし、足が疲れたから、僕も、もう帰ろうと思う」



しかし、二人は道がわからなくなりました。

「でも、どの道を帰ればいいんだろっ？」

急に強い風が吹いてきました。

「じいじいじい」大きな音です。

草が「ざわざわざわ」

木の葉が「かさかさかさ」

木が「どんどんどん」

山が大きな音を出しています。

二人は、

「お腹がすいた。何か食べたいなあ」

「もう歩きたくないなあ」

と言いました。



そのとき、二人が後ろを見ると、そこに大きな家がありました。
大きな家の入り口に、西洋料理店「山猫軒」と書いてあります。

「あ、レストランだ！」

「山の中にレストラン？ おかしいな。でも、何か食べることができるぞ」

「もちろん、できるぞ」

二人は、とてもおなかですいています。

「何か食べたい。早く入ろう」

「うん、入ろう」

二人は、レストランの前に立ちました。

レストランの戸には、金色の字で、こう書いてありました。

だれでも入ってください。どうぞ。

二人は、喜んで言いました。

「よかったなあ。今日は、一日大変
だったけれど、こんないいことも
あるんだな」

そして、戸を開けて中へ入りました。

そこには、長い廊下がありました。

二人は廊下を歩きました。

少し歩くと、青い戸がありました。

「変な家だ。どうしてこんなに

たくさん戸があるんだろうって。」

「寒くても山の中の家は、

みんなそうなのよ」



二人が戸を開けようとする時、戸に黄色い字で、ハンコがしてあります。

ここは注文の多い料理店です。

このレストランには、お客さんがたくさん来て、「これをください」「あれをください」と、
料理をたくさん注文するのでしよう。

「こんな山の中だけけど、お客さんが多いんだね」

「この店はみんなそうよ。東京のこのレストランも、どこかかないんごやなへん、
静かなといふにえぬや」

「早くテーブルのある部屋に行きたいなあ」

二人は戸を開けて、廊下を歩きました。

二人は、鉄砲を黒い台の上に置きました。

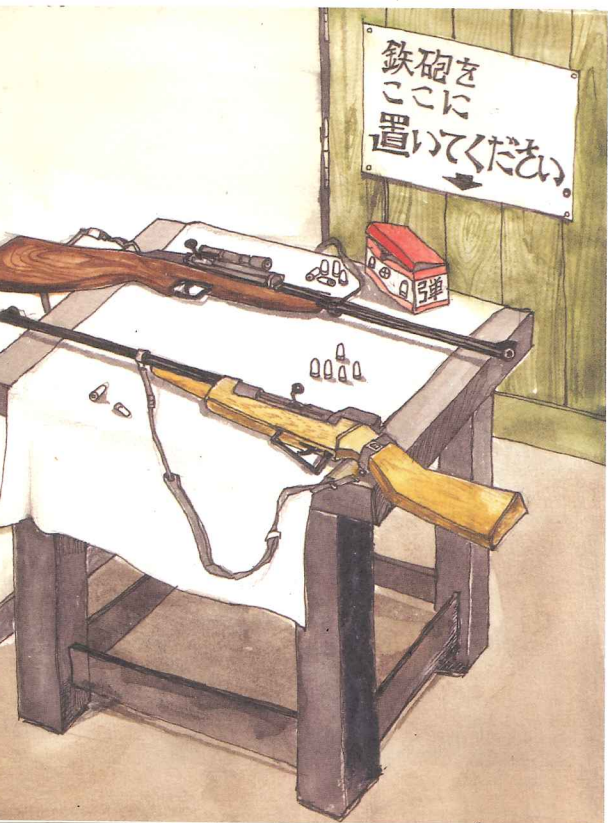
「置くところだ」

「そつだ。食事をするのに鉄砲はいらない」
戸の横に黒い台があります。

鉄砲をここに置いてください。

すると、ブラシがぼーっと薄くなって、見えなくなりました。風がどつと入ってきました。二人はびっくりしました。急いで戸を開けて、中に入りました。戸の裏に、また何か書いてあります。

二人は鏡を見ながら、ブラシで髪の毛をきれいにしました。そして、ブラシを鏡の前に置きました。



また、戸がありました。
戸の横に鏡がかかっています。
ブラシもあります。
戸には赤い字で、こう書いて
ありました。

髪の毛をきれいにしてください。

「きつこの店には、立派な人が
来るんだろうな」

「どんな料理が出るんだろう?」
「楽しみだ」

すぐ前に、今度は黒い戸がありました。

帽子とコートと靴を脱いでください。

二人は、

「仕方がないな。脱ごう」

「きつと、とても立派な人が食べに

来ているんだろう」

と言いながら、帽子とコートと靴を

脱ぎました。そして、戸を開けて、

中に入りました。

戸の裏には、また何かが書いてあります。

メガネとネクタイピンと財布を

いかに置いてください。

「料理に電気を使うのかな？」

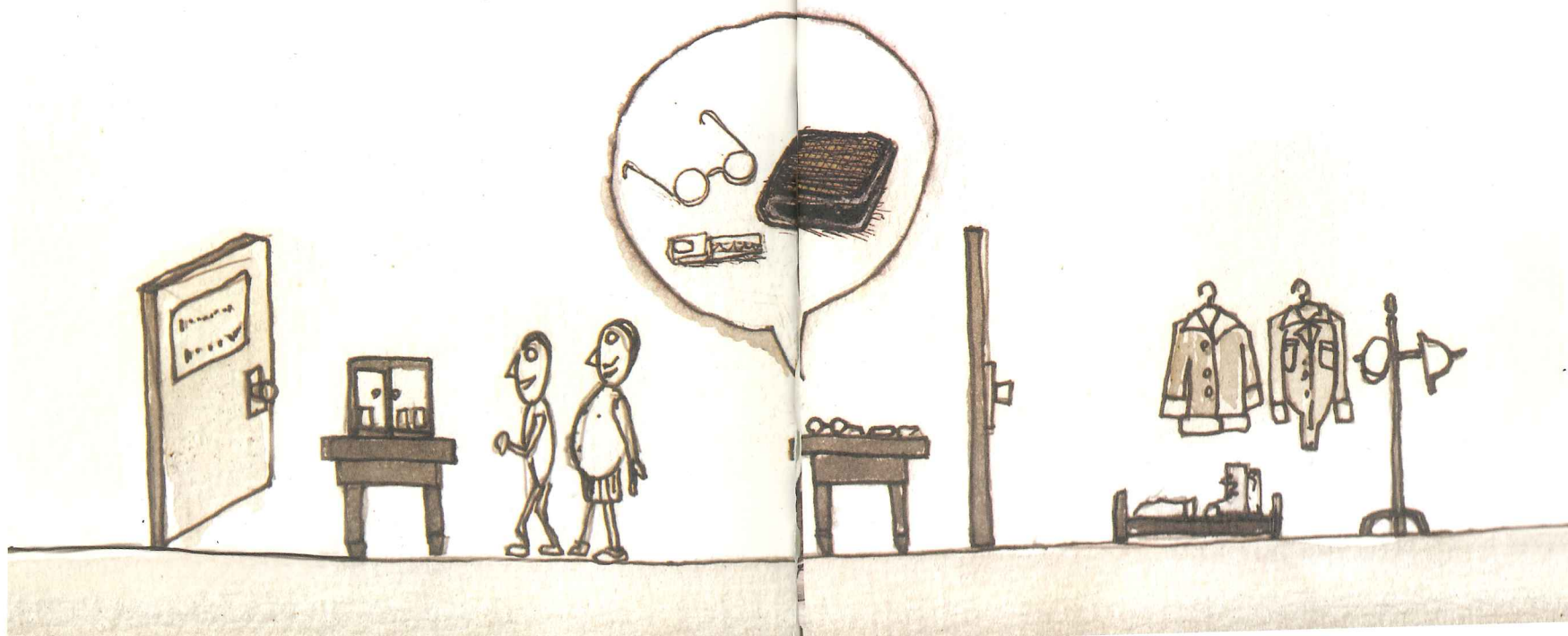
メガネとネクタイピンは、危ないから

いかに置くんだな」

「そっだ、きつと。そして、帰るとき、

ここでお金を払うんだ」

二人は、メガネとネクタイピンと財布を置きました。



少し行くと、また戸がありました。戸の前に白い入れ物があります。

この中のクリームを顔と手と足につけてください。

それは、牛乳のクリームでした。

「どうしてクリームをつけるんだろっ?」

「外は寒くて、部屋の中は暖かい。寒いところから暖かいところへ入ると、顔や手足が赤くなってしまう。だからつけるんだよ」

二人は、顔と手にクリームをつけました。

靴下を脱いで、足にもクリームをつけました。

入れ物に、まだ少しクリームがありました。それは食べてしまいました。

それから、戸を開けて、中に入ると、戸の裏に、また何か書いてあります。

耳にもクリームをつけましたか?

「あ、忘れた」

と言いながら、二人は耳にクリームをつけました。

「戸がたくさんあるなあ。」

部屋はびじだろっ?」

「早く部屋に入りたくないなあ。」

早く何か食べたいなあ」



すぐ前に、また戸がありました。
戸の前に金色のびんがあります。

料理はもうすぐできます。あと十五分ぐらいです。すぐ食べられます。
このびんの中の香水を頭につけてください。

二人は、びんの中の香水を頭につけました。

「あれ？ この香水、変だー！」

「これは香水じゃない。くさい、くさい。

あ、すっぱい。酢だー！」

「だれか間違えて酢を入れたんだな！」



二人は戸を開けて、中に入りました。
戸の裏には、大きな字が書いてありました。

注文が多くて大変でしたね。

でも、もうこれが最後の注文です。この
入れ物の中の塩を体によくつけてください。

きれいな青い入れ物があって、中に塩が
入っています。

「塩？ これは変だぞ。どっしてぼくたちが
体に塩をつけるんだ？」

「変だ、変だー！」

と、二人は言いました。



「注文というものは、お客さんの注文じゃないー!」

「レストランの注文だ! レストランがお客さんに注文しているんだ」

『靴を脱いでください』とか『クリームをつけてください』とか『塩をつけてください』

とか……。 レストランがお客さんにたくさん注文して……」

「お客さんを料理するんだー!」

「そっだ! レストランが僕たちにたくさん注文して、僕たちを料理して食べるつもりだ…

…」

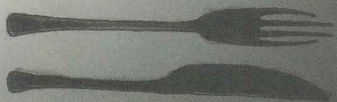
「うわあ、助けてー!」

二人は怖くなって、急いで後ろの戸を押しました。でも、戸は開きません。

前にも、もう二つ戸があります。

どうぞ、中に入ってください。

どうぞ、中に入ってください。



と、書いてありました。

ナイフとフォークの絵も描いて

あります。戸には、大きな鍵穴も

ありました。

その中から、青い目がいちばんを

見えます。





「いわぬ。

だれがいる!」

「怖い!」

二人は、

がたがた、

ぶるぶる

震え出しました。

戸の中から声が聞こえます。

「入ってこないねえ」

「困ったな」

「じゃあ、呼ぼうかっ」

「呼ぼう、呼ぼう!」

「お客さん、早く入ってください。もう準備はできています。」

あつは、あなたが白くお田んぼのるだけです。さあ、早く、早く!」

二人は、震えながら泣き始めました。

「そんなに泣かないでください。そんなに泣いたら、クリームがとれてしまいます。」

さあ、早く来てくださー」

二人は、泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

顔が、おじいさんのように、しわくちゃになりました。



そのとき、後ろから、「ワン、ワン」と大きな声がありました。

あの大きな白い犬です。二匹の犬が走ってきたのです。

犬は、大きな鍵穴のある戸を開けて、部屋に入っていました。

暗い部屋の中から、「ワン、ワン」と大きな声がします。

犬が部屋の中を走っているのです。

すると、「ニャオー。ギャー。ゴロゴロ」という大きな声がありました。



急に部屋が消えました。

二人は、寒くてびるびる震えながら、草の中に立っていました。

コートと帽子が木の枝にかかっています。靴や財布が草の上に落ちています。

強い風が吹いてきました。

「ジュンジュン」

草が「ざわざわざわ」

木の葉が「かさかさかさ」

木が「どとどとど」

山が大きな音を出しています。

犬が「ワンワン」と鳴きながら、二人のところへ走ってきました。

それから、「おーい、おーい」という声が聞こえました。案内の人の声です。

二人を呼んでいます。

二人は急に元気になって、

「おーい、おーい。ムンだ、ムンだムンだー」

と、大きな声で答えました。

案内の人が、草の中から、こちらに走ってきました。

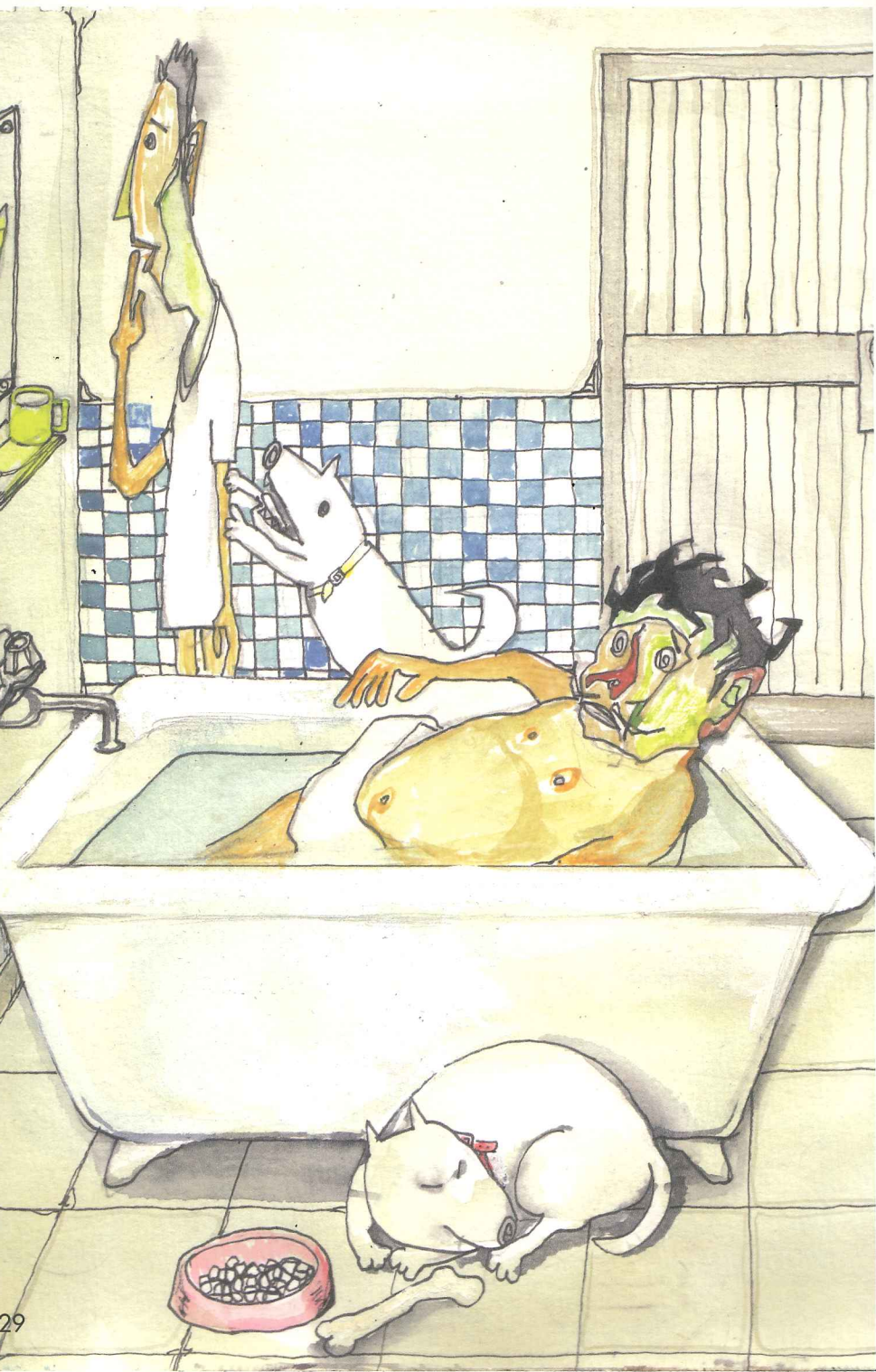
「ああ、よかった」

「もう大丈夫」

二人は、やっと安心しました。

二人は東京へ帰りました。

でも、おじいさんのように、しわくちやになった顔は、東京に帰ってもお風呂に入っても、直りませんでした。



<監修者紹介>

NPO法人 日本語多読研究会 (にほんご たどく けんきゅうかい)

当研究会は、学習者のための「読みもの」を作ることを目的に、2002年1月に発足した日本語教師の集まりです。2006年9月にNPO法人になりました。「レベル別読みもの」を開発したり、それらを使った「多読」授業の実践・研究をしています。http://www.nihongo-yomu.jp/

レベル別日本語多読ライブラリー (にほんご よむよむ文庫)

[レベル3] vol.1

注文の多い料理店

2006年10月10日 初版発行

原作：宮沢 賢治

簡約：粟野 真紀子 (日本語多読研究会会員・日本語教師)

作画：尾関 健治

監修：NPO法人 日本語多読研究会

ナレーション：山中 いっとく

録音・編集：スタジオ グラッド

デザイン・DTP：有限会社トライアングル

発行人：天谷 修平

発行：株式会社アスク 出版事業部

〒162-8558 東京都新宿区下宮比町2-6

TEL.03-3267-6866 http://www.ask-digital.co.jp

印刷・製本：株式会社光邦

許可なしに転載・複製することを禁じます。

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

© NPO法人 日本語多読研究会 2006

Printed in Japan ISBN4-87217-626-X

宮沢賢治

(一八八九六一一九三三年)



宮沢賢治は、岩手県で生まれました。

盛岡高等農林学校(現在の岩手大学農学部)で、農業の勉強をしました。そして、農林学校を出た後、岩手県の花巻農学校の先生になりました。

学生の頃から、童話や詩を書いていましたが、全然売れませんでした。

学校の先生を辞めてから、農民に新しい農業を教えました。農民の生活を良くするために、毎日、あまり食事もしないで働いたので、病気になってしまいました。三十七歳で亡くなりました。

死後、賢治の童話や詩は、たくさんの人に読まれるようになりました。岩手県にある記念館には、毎年、多くの人が足を運びます。

賢治の童話や詩には、動物や森、空や風などが出てきます。「生きているものの全部が幸せにならないければ、だれも本当に幸せになることはできない」というのが、賢治の言いたかったことです。

『注文の多い料理店』(にほんごよむよむ文庫「レベル3」VOL.1収録)、『銀河鉄道の夜』、『風の又三郎』、『ゼロ弾きのゴースト』などの童話が有名です。